HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	スリランカにおける母親の産後うつに関する疫学調査 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	常田, 美和
Citation	北海道大学. 博士(医学) 甲第14709号
Issue Date	2021-09-24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/83103
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Miwa_Tsuneta_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称　　博士（医　学）　　氏 名　常田　美和

主査　教　授　荒戸　照世
審査担当者　副査　准教授　横田　勲
副査　准教授　倉島　庸

学 位 論 文 題 名

スリランカにおける母親の産後うつに関する疫学調査
(An Epidemiological Survey of Postpartum Depression among Mothers in Sri Lanka)

申請者は、スリランカの母親の産後うつケアの向上に貢献することを目的として、産後うつの関連因子、および産後うつと関連因子との関係において緩衝作用をおよぼす可能性のある因子に関する検討を行った。

審査会では、3 人の審査担当者より以下の質疑応答がなされた。

副査の横田勲准教授より、エジンバラ産後うつ自己評価票（Edinburgh Postnatal Depression Scale ：以下 EPDS）のカットオフ値が先行研究と異なることについて指摘があった。申請者は、先行研究のカットオフ値は必ずしも一定ではなく、地域での 1 次スクリーニングで 9/10 を用いることは先行研究との比較の上でも妥当であると回答した。また、調査対象者の背景（大学病院に来院する母親の属性およびうつ病の有無）について質問があった。申請者は、社会主義共和国であるスリランカでは、ほとんどの国民が大学病院のような公的施設を利用し、私立の施設の利用者は非常に限られた富裕層に限定されている。したがって、大学病院の受診者とはいえ、これらの患者は国民一般の患者をほぼ代表すると回答した。また、うつ病の既往歴がある者およびうつ病の治療中の者は、あらかじめ分析から除外したと回答した。

副査の倉島庸准教授からは、1 年間の産後うつを調査しているが、産後月数によって状況が違うのではないかという質問があった。申請者は、産後うつの発症は産後 1 年間という WHO の定義に基づいたこと、ならびに月数別の産後うつ割合と 95%の信頼区間に差が見られなかったことから、産後 12 か月までの母親を対象に解析したと回答した。さらに、産後うつのピークと考えられる時期をサブグループとして分析に追加すると回答した。また、産後うつとその関連因子との関係性におよぼす首尾一貫感覚（Sense Of Coherence: 以下 SOC）の影響を見ているが、SOC を用いた理由について質問があった。申請者は、SOC はストレスに対して効果的に働き、ウェルネスを予測する因子となることから注目されている概念であり、周産期というストレスフルな時期にある母親の精神的健康状態全般に関連している SOC を、産後うつの予防に活用できるのではないか

と考えたと回答した。最後に、スリランカの調査結果から、アジアの中でスリランカの産後うつの割合が高い理由および結果のグローバルな応用ができるかについてさらに考察を深める必要があると助言があった。

主査の荒戸照世教授からは、スリランカの先行研究結果のみならず、それ以外の地域における研究と比較考察するよう助言があった。また、SOC の緩衝作用について、諸外国の先行研究ではどのような知見があるのかという質問があり、北欧などにおいて、SOC を高めることにより、国民の健康の保持増進が図られ、その結果医療費の抑制に効果がみられたという報告があることを説明した。さらに、SOC の強化策について具体的に考察し、本研究結果を一般化するよう助言があった。

これらの議論を踏まえ、産後うつの関連因子について産後 1 か月のサブグループ解析の結果が追加提出されるとともに、緒言および考察が改められた。副査の横田准教授からは、サブグループ解析において有意差のみの 2 分論で説明を組み立てているが、1 か月と全体のリスクの大きさを比較して関連因子が早期の産後うつに影響を及ぼすかを検討し、オッズ比で議論する方がよいとの指摘があり、申請者は、有意差の他にオッズ比の大きさに着目した考察を追加した。

スリランカにおいて、これまで産後うつに関する研究の蓄積は少ないことから、本論文は横断研究によりスリランカにおける母親の産後うつの実態を明らかにし、当該国の産後うつ予防対策に対する貴重な資料となるものである。さらに、SOC の産後うつと関連因子の関係におよぼす緩衝作用を示した点において高く評価され、今後、産後うつ予防に向けた SOC に関する研究のグローバルな展開に貢献する可能性が期待される。

審査員一同は、これらの成果を高く評価し、大学院課程における研鑽や取得単位なども併せ、申請者が博士（医学）の学位を受けるのに充分な資格を有するものと判定した。